宮沢理恵子の『建国大学と民族協和』（一九九七）を読む

周　軍

一

一九三八年に「満州国」に創設された「満州帝国建国大学」について、貴重な成果である宮沢理恵子の『建国大学と民族協和』が出版された。

宮沢の主たる論点は、「満州国」で抑圧的な植民地支配が行われていたのと違って、建大では各民族の平等をはじめとする「民族協和」が真剣に試みられており、建大はその時代のなかの独特かつ貴重な存在であったというものである。

槻木瑞生は宮沢の本書の書評のなかで、「満州国」における高等教育を研究するうえで欠かせない課題として、次の二点を指摘している。[1]

(1) 建大は「満州国」の諸高等教育機関のなかで特殊な存在であった。

(2) 建大では「民族協和」ないし「国際性」の実験が試みられていた。

このような宮沢ないし槻木の考え方は、そのほかの民族の立場を重視せず、日本人の立場にしかたたないものであり、従来の日本人による研究の範疇を脱していない。そのことが中国人研究者の反発を招いている。王智新はその『日本の植民地教育・中国からの視点』のなかで、以下のように批評している。

> 日本帝国主義が軍事的に中国を侵略したのはたしかに悪いが、しかし、占領地で教育も実施し、中国、少なくとも中国東北地方の文化教育事業の発展に結果的に貢献したとする奇怪な言論は、日本でかなり共感を呼ぶらしい。軍事および政治では侵略し、経済的には略奪したが、文化教育だけは援助したという論法になる。そのような帝国主義的強盗の論理に対し、われわれは強い怒りを覚え

ると同時に、深い憂慮も抱いている。日本の将来と中国と日本との関係、そして、アジアと世界の未来を憂うるのである。日本帝国主義が東北部をはじめ、中国全土を軍事的に占領し、経済的略奪に奉仕するため、文化教育を目的達成の手段として使用したことは周知の通りである。[2]

もちろん、中国人研究者の間では、建大を根本的に植民地における日本帝国主義の文化支配の一環として否定的に捉えている傾向が根強いことも否定できない。

さて、本書の構成は以下のようである。

序
第一章　建国大学の創設
第二章　建国大学の教育と活動
第三章　学生生活と民族協和の実践
第四章　建国大学の終焉
結論　建国大学と民族協和

ともあれ、建大、すなわち「満州帝国建国大学」が、石原莞爾・辻正信等の関東軍を主体として、一九三八年「満州国」で創立した高等教育機関であり、一九四五年日本の敗戦とともに消滅したということは、事実である。

二

宮沢の研究の主たる問題点は、その研究の手法に露呈されている。宮沢の著書の最後に挙げられている「参考文献目録」のなかに、中国人によって書かれたものは、わずか四篇にすぎず、使用された全文献の二%にも満たない。しかも、かつての建大出身の日本人学生の多くは、回想録のなかで建大に対して懐かしい思いを寄せており、それらの日本人関係者の資料を中心に書かれれば、当然それらの日本人の片思いという印象が与えられる。したがって、宮沢の研究には、関係資料の偏りが明確に見られ、それに立脚した研究も当然偏りがあると言わざるをえない。

建大に関する資料のほとんどが日本人によって書かれたものであることは否定できないが、中国人建大生によるものがないわけではない。[3]例えば、『回憶偽満建大』(一九九七)という回想録は、かつて建大出身の中国人学生六十数名(全中国人学生五二〇名の一二%に相当する)の寄稿より編纂された回想録である。[4]

宮沢は建大とかかわっていた日本人が、今なお当時のことを本気で懐かしんでいる事実に着目し、彼らの懐かしむ原因を追求し、その原因を建大の建学理念に求め、その理念を評価し、建大に対して、一定の肯定的な見解を下している。言

い換えれば、かつて大学にかかわっていた日本人の夢＝「理想」が宮沢に拾われて再評価される形となっている。

宮沢の拾った「理想」は、本のタイトルに示されるように、「民族協和」を指している。建大では、日・満・漢・鮮・蒙の五つの民族に勉学と生活をともにさせ、塾生活または塾教育という形で「民族協和」が模索された。「民族協和」を具体化することに結果的に失敗したとしても、その模索の過程は日本人の思い出となり、今でも忘れることのできない「理想」として定着されていると考えられる。宮沢は建大の塾生活のなかに「民族協和」の実現可能性を見出し、それを今日の日本の国際交流にとっての遺産に値するものと位置づけようとしている。

> 結果的には失敗に終わったにせよ、建大は他民族の共存について真剣に思考し、実践にも努めており、日本人の創った大学としては今なお特異な存在である。[5]

しかし、建大に入学した中国人学生は五二〇名がいたが、その六％にあたる三二名が逮捕され、その八％にあたる四一名が中退したというのは、「民族協和」の破綻の象徴であり、期瞞的証明でもあったという見解がある。[6]

『回憶偽満建大』には、建大を厳しく糾弾している者が六〇名（一二％）おり、逮捕された三二名、中退した四一名を加えて、「民族協和」に反対と見られるのは、中国人学生五二〇名のうち一三三名（二六％）にすぎない。これだけでは、「民族協和」が破綻していたというには不十分であり、五二〇名の中国人学生が「民族協和」に対して、どのような認識を持っていたのかは、まだ不明のままである。

ともかく、建大がどのような大学であったのか、そこでどのような塾教育が行われていたのか、建大中国人卒業生の回想録『回憶偽満建大』（一九九七）と二期生西村十郎の日記（一九九一）を参照して検討したい。

三

宮沢は塾教育における「民族協和」を「団体生活」、「食事」、「座談会」という三つの側面から考察している。そのなかで、日中学生の習慣の相違が摩擦を引き起こしていたが、日中学生の間に基本的に平等かつ自由な生活があったと主張している。

特に「座談会」は「民族協和」の重要な一環として、そこで日本への批判が絶えなかったこと、学生間の真剣に理解しあう場であったことが指摘されている。[7]しかし、西村の日記を照らしてみると、必ずしもそのようには捉えられていない。

西村の日記によれば、一九三九年の一年間、座談会は三回しか行われていなかった。最初の座談会は、一九三九年四月二九日の夜、塾で夕方から夜一〇時まで行われたが、「塾頭先生のお話を聞く」だけであった。[8]次の座談会は同年の六月三日、「夕食後七時から、今までお世話になった楊さんを送り、新しい崔さんを迎える」ためのものであった。[9]同年の九月九日、夜七時から九時すぎまで座談会があった。[10]

このように一年間わずか三回、しかも毎回二、三時間程度の座談会が、本当に「学生の相互理解と交流に一定の成果をあげ、満州国のスローガンと『建国精神』イデオロギーから離れた『民族協和』について思考する機会を学生に与えたのであった」[11]かどうかについて、疑問視せざるをえない。しかも、この三回の座談会は学生を自由に討論させる場ではなかったことも西村の日記から明らかであり、学生間の意思疎通ないし「国際交流」には程遠いものである。

但し、座談会が主催された西村の属した塾の塾頭内田一男は、中国人学生にとって、比較的に信頼できる穏やかな人物であったことも事実であったようで、抗日運動で憲兵に逮捕された建大中国人学生趙洪(二期生)が、よく内田先生から進歩的な中国語の本を借りたことがきっかけで、抗日運動に走ったと回想している。

建大には、学生がマルクス主義等のような当時では禁書とされた本まである程度自由に読める環境が一時的にあった。高克(八期生)は、建大の副総長であった作田荘一が、植民地支配理論を構築するために、学生に寛容な環境を提供していた、と述べている。[12]そのような環境のなかで、中国人学生は進歩的な書籍を読むことができ、それに啓蒙され、ついに反日する敵愾心が惹起されるに至った。もちろん、このような環境を設定した目的は、学生に批判的な精神を育てるためであろうが、反日意識を高める結果になるとは、作田の予想外であった。

同時に、植民地支配の現実が存在する限り、学生は絶えずその影響を受けざるをえない。例えば、可人(八期生)は、学校内では各民族が「米」をともに食べていたが、学校の外に出ると、「米」を持っていたら、「経済犯」とされる現実では、各民族が「食事」をともにしていても、たいした意味がないと指摘している。[13]また、劉永貞(五期生)が親族訪問のために、米を所持していたために汽車のなかで捕まえられ、拷問で殺されるという事件があり、それに触発された可人は「民族協和」を信用しなくなっていた。

> 要するに、学内や塾内でいくら民族協和、日満一体が高唱されても、それと全く相反する現実が存在する限り、学生たちの政治への不信の念を拭うことはできなかった。

寮内における各民族間の心理的対立を除去することは、とうてい不可能であった。それを「教授、学生とも一体となって考え、研究し、苦しんだところに、教育の成果があがったものといえよう」と述べる無神経さこそ、「満州国」を支配した日本人の心情をよく表明している（中略）日本人が実質上の最高責任者であり、日本人の教官が講義し、日本語で教育する大学が、どうして民族協和を実現することができようか。どうして「満州国」立大学であり得ようか。すべては日本人の傲慢であり、不遜であった。これほど中国人を無視し、踏みつけにした学校があったのであろうか（中略）虚構の上に立っていた建大は、崩壊すべくして崩壊したのであった。[14]

他方、建大の塾教育について、日本人関係者がいくら称賛しても、自画自賛と批判される恐れも否定できないので、日本人以外の学生の評価がより重要になる。

劉世沢（一期生）は日中両国の学生が同床異夢の塾生活を送っていたと主張している。[15]劉によれば、一九四一年の太平洋戦争の勃発と一六名の中国人学生が逮捕された事件をきっかけとして、前期三年において、中国人学生への思想的な取り締まりがさらに厳しくなった。特に塾頭は中国人学生への監視・嫌がらせを強めただけではなく、禁書を読んだり反日の態度を取ったりする学生に対して、脅迫・拷問・禁錮・退学などを行った。

日本人優越論の横行する時代において、民族協和・民族平等は実際にはありえなかった。趙洪（二期生）によれば、建大では、表面では各民族の学生が平等に生活をともにしていたが、実際には日本人の先生と学生が優越感を持っており、自分たちがよく軽蔑されていた。特に自分たちは「満系」と呼ばれたり、理由なく日本人教官に叱れられたり、屈辱感を味わされた。それだけではなく、塾頭のなかには憲兵の特務もおり、常に学生への監視を緩めることはなかった。[16]

但し、塾教育は同窓愛を妨げるものでもなかったし、そこで少なくとも同窓愛が培われていたことも確かである。

例えば、中国人建大生はその回想録のなかで、建大がいかなる性質を持っていても、日本人学生を含む建大の学生は必ずしも植民地支配の「手先」になったわけではないと強調している。[17]それは、自分たちが祖国に反逆して、民族の罪人、いわば「漢奸」ではなかったことを弁解する意味もあろうが、日本人学生をもカバーしていることから、彼らと日本人学生との強い連帯感が読み取れる。したがって、建大を論じるとき、すべて侵略者対被侵略者というカテゴリーで議論を展開すれば、日中間の同窓愛と師弟愛が無視されることにつながりかねない。

しかし、宮沢が憲兵に投獄された中国人建大生への日本人教師と学生の懸命救助などのような事実を取り上げられるのは、また別の理由がある。

この文書（「赵洪控訴書」）[18]には書かれていないが、建大の教職員と学生は、検挙された学生の救出と支援に奔走した。作田荘一副総長は、大学が責任を持って彼らを再指導するから出獄を認めてくれるように、憲兵隊に何度も依頼した。拘束中自殺を計った建大生を引き取り、病院にいれた教職員もいる。中国人家族の面会・差し入れが許されないならと、日本人建大生が家族の代わりに、もしくは家族を同伴して、面会・差し入れを行なった。[19]

宮沢の議論の主眼は、学生間及び師弟間の繋がりに置くものではなく、上述したような繋がりを「民族協和」の成果として捉えている。

実際には、当時日中の同窓愛と師弟愛は限られており、敗戦後に強烈になったのではないかと考えられる。

建大生の西村十郎（二期生）は、一九四一年十一月十四日の逮捕事件について、その日記のなかで「反満抗日容疑で満系学生十余名が憲兵隊によりトラックで連行された。激しいショックに茫然となる」と記している。このようなショックを受けたのは、中国人学生の活動を耳にしたことは無かったためであろう。

そして、十二月三日まで、西村は日記を書いていない。三週間も日記を書かなかったのは、日記が逮捕につながる証拠になりうる可能性を認識するようになったのではないかと推測される。後年、西村は当時「逮捕された学生への幼稚の怒りと、主権の異なる国の学園侵入に対する純心な憤りが交錯していた」と回想している。[20]逮捕された中国人学生に対して、西村は同情よりも怒りを感じたと述べているように、諸民族の間に意思の疎通は足りなかったと言えよう。

このような民族間の隔たりについては、谷学謙（七期生）が詳しい。谷学謙の父と伯父は「満州国」の高官であり、彼も日本人の親友を持っており、中国語より日本語のほうが得意であったという。建大に入学してから、彼の見た現実は、日中の学生があまり付き合わず、表には互いに何もなかったが、実際には対立していた。そのような現実のなかで、自分は民族対立の渦に巻き込まれ、苦しい判断に迫られていた、と回想している。[21]

前述した可人（八期生）は個人的な関係と「民族協和」を区別すべきであると主張しているように、[22]塾教育ないし「民族協和」は政策であり、それは諸民族を大和民族に同化させることを目的にしているのに対して、個人的な付き合いは多様

であった。すなわち、民族が対立するなかでも、個人的な繋がりをつくることは可能であった。

四

宮沢は建大がほかの高等教育機関よりも高い予算をもらったことから、「満州国」の特別な最高学府であり、破格的な待遇の背景には、大学への関東軍のバックアップがあったことと、将来満州国の指導的な人材を育成することへの期待があったこと、にその原因があったと指摘している。

宮沢が建大の創設における関東軍の果たした役割を重視し、その創立の過程を詳細的に分析したことは評価すべきであるが、関東軍が建大を創設した狙いはいったい何であったのか、ひいては関東軍を如何に評価すべきかについて、もっと突っ込んだ分析が望まれるところである。

なぜ関東軍が建大を設置しなければならなかったのか、植民地支配以外にも原因があったという指摘がある。王智新によれば、建大は日本における大学設置の手法と違って、関東軍によって創立されたものであり、その組織も日本の大学のような伝統的自治をもたず、軍と学校の長によって一元的な管理体制が敷かれていた。軍と彼らの御用学者たちは、建大を設置し、その管理体制を日本に逆輸入し、軍出身の荒木文部大臣の大学自治取締り政策に呼応すること、これが建大を創立した目的であった。[23]「建大開学勅書」の起草にかかわった佐藤胆斎、筒井清彦、根本龍太郎、田川博明は関東軍の御用学者であっただけではなく、作田荘一は天皇制ファシズムの経済論者、筧克彦は神道主義者、平泉澄は皇国史観の熱狂的な鼓吹者であったため、「石原莞爾を含めて、建大の創設に加わった委員たちは、近代的な大学ではなく、東洋的ないし日本的な伝統を発揚しうる新たな教育システムにすぎなかった。[24]

確かに建大は日本国内の大学と違い、斬新な学校であった。王庭棟（八期生）によれば、自由な精神に富み、身体的に病弱な学生を育てていた日本国内の大学と異なり、建大では訓練が重視されていた。[25]このような建大について、中国人建大生は「偽満建大は日本関東軍によって造られ、終始その厳しい監視下に置かれており、その侵略政策、植民地支配を遂行するための手先を培う大学である」という厳しい見方を示している。[26]

建大は勅令によって創立された学校であった点から、そのほかの大学と一線を画していた。[27]『満州年鑑6』（一九四〇）のなかでも、建大は大同学院とともに、特殊教育に分類されており、[28]建大で行われた教育は、普通の高等教育ではなかった。以下、建大の教育の特殊性について検討してみたい。

五

一九三七年、「満州国」は新たな学制を公布したが、高等教育に関して、「高等教育は高等の学術に関する理論及実際を修得せしめ以て国家枢要の人材を養成するを其の本旨とす」と規定している。すなわち、高等教育は、学術の発展よりも、国家のためのエリートの養成を目的としていたのである。

『学校用網』によれば、国民高等学校の目的は、「国民道徳を涵養して国民精神を修練し身体を鍛錬し実業教育を基調として国民必須の知識技能を授け労作の習慣を養ひ以て国民の中堅たるべき男子を養成するを其の目的とする」[29]のであり、大学の目的について、「鞏固なる国民精神を修練し高等の学術理論及実際を修得せしめ以て国家枢要の人材を養成するを其の本旨とす」と規定していた。[30]

しかし、建大の目的はそれらの目的とは異なっていた。建大の場合は、「建国精神の神髄を体得し学問の蘊奥を究め身をもってこれを実践し道義世界建設の先覚的指導者たる人材を養成するを目的」とするものであった。[31]建大と同様に国務院に属していた大同学院の場合も、一九三二年七月十一日教令第六十号によれば、「大同学院は国務院総務庁の管理に属し、官公吏たるべきものを養成訓練する」[32]という明確な目的を持っていたのに比べると、建大の持つ目的は曖昧であったと言わざるを得ない。

ここで言う建国精神というのは、「満州国」の建国の理念であり、関東軍の石原莞爾や辻正信などをはじめ、多くの日本人関係者によって提唱されたものである。もし建大の目的が宮沢の言うように建国精神を具体化するだけであれば、それはどこの大学でもできないはずのない課題であろう。しかも、手間と資金を惜しまず、新たな大学を設立したことは、経済性の点だけから考えてみても、疑わしいのである。しかも、「満州国」が建国されてから七年しか経たず、国を安定させるのに精一杯であり、国庫はそこまで潤沢になったとはとうてい考えられない。

建大がいったいどういう目的をもっていたのかを考察するためには、どのような学生を育てようとしていたのか、その方針を明らかにしなければならない。西村十郎（二期生）の日記に次のように記している。

> ここで私は後期課程について文教科を選んだ理由について記しておきたい。
> 建大は国の将来を背負うべき高級官僚の養成機関とみられ、明治初期の東京帝大と比され、私自身もそのような予備知識だけで入学したのだが、内部に入ってみると、軍事訓練、武道訓練、農事訓練の厳しさに比べ、知識の

詰め込み教育は少く、個人の考えについては予期しない寛大さであり、一人一人が自分の進むべき道を選んだのであったが、図書室から小説ばかりを借り出して、読み漁っていた私に対しても、注意は一言もないままに、凡そ方角違いをしていたのだが、ワイル氏病による長期入院中の苦悩と、下記のことによって、教育の世界を自分の進むべき道と思ひ、その手段として映画製作を念じるようになったが、「字の読めない人、学校に通えない人を含め国民全員に適する教育は映画が最適である。」というのがその原因であつた。[33]

二年の後期課程を経て、卒業の年に西村は、それまでの五年間を振り返って、次のように述べている。

建大に入学してよりの五年間に受けた教育で多くを教わり聞いてきたもの、そのほとんどは忘れ消え去つてしまつたけれども、満州国を愛し、東亜を愛し、そして世界の平和を希ふ心をいただいたのは、何物にも変えられぬ有難さである。[34]

前期の終わりごろと後期の終わりごろに書いた日記を比較すればわかるように、前期の終わりごろには国のためとは言え、まだ自分の夢があったのに対して、後期の三年間の教育を受けた結果、「建国精神」が牢固に植え付けられ、国に奉仕する心、いわば「満州国」の官僚としての自覚がしっかりと固められていたことがわかる。

一九四二年十二月七日、西村ら学生は「満州国」の国民学校を見学したが、その日記から、西村に「満州国」国民としての自覚を見てとることができる。

国史、地理、算数の授業を見学したが、私の育って来た小学校と眼前の国民学校との差異の激しさには感心の外なかった。戦時下なれば忠義を教えるは尤もながら、国民といふには幼なすぎる子達に、死ぬ事のみが日本人の務めと教えるのには、驚いたが、それ以上に驚いたのは、午後の懇談会における先生方の満州に対する認識の無さであった。日本の文部省の教育方針においては建国以来十年を経た満州国も全く認められず、租界地におけるが如き教育が行われつづけて居るようである。在満教務部の存在は日本人教育はあっても満州国民としての教育はまかり成らぬときめて居るのであろうか。[35]

「満州国」の官僚としての養成が建大の目的の一つであったため、建大の卒業式には「満州国」皇帝溥儀が臨席しており、[36]

卒業後、他の大学と比較できない待遇を得ていた。

建大生に対する優遇は卒業後だけではなく、入学する時点から与えられていた。それは建大生の優越感を培うためと思われる。

例えば、日本人建大生は合格してから、東京に集められたが、それは「入学前の訓練」というよりも、むしろ激励というべきものであった。西村当ての集合通知書には、「三月二十九日九時に日本青年会館に集合し、関係機関に挨拶廻りの後、伊勢神宮等に参拝をし、四月四日十二時神戸出帆の船で大連へ向かう」と書かれていた。[37]二十九日、日本青年会館に着き、そこで支給された建大の制服に着替えて、あちこちを見学した。三十日、陸軍省と駐日満州国大使館に挨拶して、午後上野公園等を見学し、六時から駐日満州国阮大使、本庄大将等が参加する宴会に赴いた。その後、出発するまでの数日間、学界の泰斗より講話を受けた。

他方、中国人建大生の劉世沢(五期生)[38]によれば、建大後期を終えた者は自動的に高等文官資格を有していた。しかも、学科試験が免除され、面接試験を合格するだけで、「高等文官試補委任令」を授与され、大同学院の第一練成部で三ヶ月の訓練を受けた後に、「満州国」の国務院から仕事を分配され、給料も他の大学卒より高かった。他の大学卒業生は同様な「高等文官試補」になるためには、就職してから数年後に、厳しい試験に合格しなければならなかった。于家斉(第一期生)[39]によれば、一九四三年卒の第一期生一〇六名が「高等文官試補」として、大同学院の一六期生になり訓練を受けた結果、多くの者が協和会の県本部部長に、[40]一部が鉄鉱企業の職員に、少数の者が地方行政機関と司法検察機関に就職し、一部の日本人学生は軍隊に入隊した。

建大の目的は官僚を養成するに止まらず、軍の下級将校を担える人材をも養成していた。

学問をもっぱらとせず、「下級将校程度の戦闘指揮の執れることを目標に」[41]という士官学校なみの厳しい軍事訓練も日常的に行われていたという建大の教育内容から推測すると、どうも関東軍と建大とは何らかの接点があったように思わざるをえない。建大は単なる教育機関ではなく、準士官学校の性質をもっていたのではなろうか。

高克(八期生)は、軍事訓練が多かったと記している。[42]三十八式銃が学生一人に一丁ずつ配備され、普段塾舎の入り口にある木製の棚に置かれていた。軍事訓練の際、銃を所持して、完全武装した形で訓練を受けた。射撃訓練の場合には、三十八式銃だけではなく、軽・重機関銃や手榴弾も使われていた。戦術訓練の場合は、年一回程度の大規模な演習まで行われた。訓練はかなり厳しく、そのため命を落した学生も出た。

上述したように、建大は文武兼備の官僚を培う特殊な教育機関であった。

六

以上述べたように、建大は特殊な大学であり、その卒業生は「満州国」の文武を兼ねそなえたエリート官僚になることが期待し予定されていた。しかし、皮肉にも、「満州国」のために育てたエリートたち、とりわけ中国人学生は反日になっており、抗日活動に参加するようになっていた。建大の教育の目的は親日派に育てるためであったが、逆に反日ないし抗日的な学生を育ててしまったのは、建大の教育の失敗にほかならない。残念なことに、この半世紀前の過ちは反省されるどころか、「理想」として再評価されて、今日における日本の国際交流のモデルにされようとしている。

建大での塾教育は今日の日本の国際交流の教訓になりうるが、その模範になってはいけない。今日の国際交流は、諸民族の互いの平等と尊重のうえに成り立っているわけで、塾教育における日本文化への同化とは根本的に異なっている。換言すれば、建大の塾教育の目的は、あくまでも日本人を中心に、日本的風習と文化を基準として、多民族の学生を教化していくことにあった。したがって、宮沢のような考え方が今日なお生きているからこそ、日本に批判的な多くの留学生を育んでいるのではないかと考えられる。

確かに、半世紀前日本人の学生は「民族協和」のために、塾教育のなかで多民族を日本の習慣と文明に同化させるために、苦悩を余儀なくさせられていた。彼らの真剣さはついに実を結ばず、幻と化してしまった。彼らを悪かったと責めるべきではなく、彼らをそう信じ込ませた教育者と指導者に多大な責任があろう。中国人の建大生たちの回想録からもわかるように、多くの批判が塾頭に向けられており、入隊までさせられた日本人の学生に同情の思いを寄せている。

他方、中国人の建大生たちは戦後、中国の国家建設のために多大な貢献をしており、それなりの地位を得ていたことも事実である。彼らは建大から知識を得ると同時に、建大に反抗しなければいけない人一倍の辛さと苦悩こそが、彼らを鍛えていたのであろう。これは建大に入学する時点から、すでに彼らの宿命であった。

中国で出版された東北教育史に関する最新の成果である『東北高等教育史』(二〇〇〇)は、「満州国」の高等教育について、学校の規模は東北軍閥のものより劣り、思想教育の重視、修業年限の短縮、理工科重視による学科設置の偏り、在学した中国人の人数の少なさを、その特徴として挙げ、日本による植民地支配の道具に過ぎなかったと強調しながらも、「満州国」の教育をうけた人々が、その後の中国の社会経済の発展に役立つ知識を手に入れたと評価している。[43]これは中国人建大生へのもっとも公正的な評価ではないかと思われる。

注

1 詳細は、槻木瑞生（一九九八）「書評—宮沢理恵子著『建国大学と民族協和』」『アジア経済』、33：110—114頁を参照されたい。

2 王智新（二〇〇〇）『日本の植民地教育・中国からの視点』、社会評論社、10頁。

3 詳細は、山根幸夫の論文（「「満洲」建国大学に関する書誌」『近代中国研究彙報（東洋文庫）』一九九六年　第18号：117—128頁）を参照されたい。

4 長春市政治協商委員会文史与学習委員会編（一九九七）『回憶偽満建国大学』（長春市文史資料総第49輯）、長春市政治協商委員会文史与学習委員会編集委員会発行。

5 宮沢理恵子（一九九七）『建国大学と民族協和』、風間書店、263頁。

6 前掲王智新、191頁。

7 前掲宮沢、209—213頁。

8 西村十郎著（一九九一）『楽久我記』、まろうど社、38頁。

9 前掲西村、51頁。

10 前掲西村、86頁。

11 前掲宮沢、213頁。

12 高克「偽満建大反満抗日活動及其発展」『回憶偽満建国大学』、91頁。

13 可人「在〝協和〟的宣伝橱窓里—論〝民族協和〟与偽満建大」『回憶偽満建国大学』、388頁。

14 山根幸夫（一九八七）「「満州」建国大学の一考察」『社会科学討究』、第32号（807—839頁）、830—835頁。

15 劉世沢「偽満建国大学概述」『回憶偽満建国大学』、36頁。

16 呉秀実「〝塾歌〟及其他」『回憶偽満建国大学』、255頁。

17 『回憶偽満建国大学』の「序」を参照。

18 この文書は、赵洪「我的控訴」『回憶偽満建国大学』、154—163頁を参照。

19 前掲宮沢、228頁。

20 前掲西村、174頁。

21 谷学謙「生活在民族矛盾之中」『回憶偽満建国大学』、268—273頁。

22 前掲可人、390頁。

23 前掲王智新、185—186頁。

24 前掲王智新、184頁。

25 王庭棟「歴史的諷刺」『回憶偽満建国大学』、314—315頁。

26 『回憶偽満建国大学』の「序」を参照。

27 皆川豊治著（一九四〇）『満洲国の教育』（建国読本第六編）、満洲帝国教育会、194頁。

28 『植民地年鑑6：満州年鑑6』（昭和十五年）（復刻版）、日本図書センター、一九九九年を参照されたい。

29 『植民地年鑑4：満州年鑑4』（昭和十三年）（復刻版）、日本図書センター、一九九九年、362頁。

30 前掲『満州年鑑4』、363頁。

31　前掲『満州年鑑4』、365頁。

32　『植民地年鑑1：満州年鑑1』（昭和8年）（復刻版）、日本図書センター、一九九九年、537頁。

33　前掲西村、177頁。

34　前掲西村、285頁。

35　前掲西村、256―257頁。

36　第一期卒業生が一九四三年六月十二日卒業式の際、「満州国」皇帝溥儀が臨席していたと、顔廷超が回想している（顔廷超「偽満建国大学始末摘記」『回憶偽満建国大学』、24頁）。

37　前掲西村、21頁。

38　劉世沢「偽満建国大学概述」『回憶偽満建国大学』、31頁。

39　于家斉「偽満建国大学及其剖析」『回憶偽満建国大学』、20頁。

40　建大生が在学中、制服の襟に協和会の会章を付けていたことは、学生と「満州国」の唯一の政治団体であった協和会との繋がりを物語っている。

41　前掲宮沢、109頁。

42　前掲高克、88―89頁。

43　詳細は、劉兆偉ほか編著（二〇〇〇）『東北高等教育史』、遼寧大学出版社を参照されたい。